

「復活の主イエス、トマスに現れる」

2025年03月06日

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「私たちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の痕を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れなければ、私は決して信じない。」八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「私の主、私の神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである。」(ヨハネ 20:24~29)

復活した主イエスが弟子たちに現れた時、ディディモ（双子）と呼ばれるトマスは一緒にいなかった。弟子たちは、主イエスが十字架で殺されて居なくなり、悲しみに打ちしおれ、肩を寄せ合っていたが、ひとりトマスは離れて行った。彼は、主イエスの死で全てが終わったと思い、宣教団から離れ、自分の人生を生きようと、弟子たちと訣別したのである。感傷に溺れるような人ではなく、現実を直視した。「最後の晚餐」の際に、主イエスが「私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と言われた時、トマスは真っ先に、「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません」と応じている。彼は、目に見えない神に至る道など知ることのできないユダヤ的な現実主義者であった。かつて、ベタニアのラザロが病気であると知らされた時、弟子たちが行けば、石打ちに合い、殺されると行くことに反対していた。二日後、主イエスは、「さあ、彼のところへ行こう」と言われた。その時、トマスは、「私たちも行って、一緒に死のうではないか」と言って、恐れる弟子たちにベタニア行きを促した。彼は主イエスと一緒に死んでもいいと、主イエスへの篤い思いを抱いていた弟子でもあった。

潜んでいた弟子たちは、復活の主イエスにまみえ、喜び、離れていったトマスを捜し出し、「私たちは主を見た」と、主イエスは復活して生きておられると告げた。するとトマスは、「あの方の手に釘の痕を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れなければ、私は決して信じない」と、死人の復活などあり得ないと言いつつ放った。弟子たちは、信じないトマスを、強引に仲間に引き戻し、8日間も引き留めた。この間、トマスは弟子たちの「主を見た」と言う証言を嘲笑ったであろう。しかし、弟子たちはトマスを引き留め続けた。主イエスは生きておられるという彼らの喜びが、彼を仲間から離さなかったのである。8日の後、弟子たちはトマスと共にいて、戸に鍵をかけていたのに、復活した主イエスが来られ、真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と、ご自分を現された。そして、トマスに、両手を広げて十字架の釘跡を見せ、槍で刺された脇腹を見せ、「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言われた。圧倒されたトマスは、「私の主、私の神よ」と言った。彼は、死を超えた永遠の世界を見て、ナザレのイエスを私の主と受け止めて「キリスト告白」をした。すると、主イエスは、「私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである」と言われた。この言葉が、著者ヨハネの復活をいぶかる人々への、また、私たちへのメッセージである。